

外間守善氏の沖繩の稲作文化の由來說から察するにその昔、「アマミキヨ」なる女神が海の彼方から渡来し、沖繩に「稲作文化」をもたらしたという伝説がある。この伝説から察するに、多分、稲作文化をもった私たち先祖は、ひよっとすると、赤道近くの地域に端を発し、黒潮に乗って島づたいに北上してきた民族のように思えてならない。

しかも、稲作文化を主体とする農耕民族は各島々のお嶽を中心にして祭祀儀礼の中で生きてきた。そのことは今、現に遺っている沖繩各地の民俗芸能がそのことを如実に物語っている。おそらく、お嶽中心の祭祀儀礼の催しの中には音楽、舞踊はつきもので、これ等文化も確か、民族が海の彼方より移動して来る際、ともに、運ばれてきたものと考えられる。

先に述べた『徒然草』の中にある「和国は律の国にて呂の音なし」という日本の律音階もひよっとしたら、これも、その昔、海の彼方からもたらされた文化なのかも知れない。なぜなら、それと同一の文化が日本のはるか南の八重山や奄美の島々の民謡の中にみられるからである。

その文化も、おそらく、南の島で生まれ、黒潮に乗って島づたいに北上し、九州を初め、四国、本州へと伝播したのではないかと考えられる。その証拠に、沖繩や奄美等に見られる乱舞形民謡の中に同一のリズムが九州の「ハイヤ節」や四国の「阿波踊り」等の民謡の中にみられるからである。これ等、乱舞形の波乗りリズムが海に生きる人々の喜びを表わす音楽として今もなお、それぞれの地域の人々の暮しの中に息づいているからである。

日本文化の成り立ちを私なりに考えてみた場合、その一つは南風(はえ)の島から島づたいに黒潮に乗って北上してきた文化と、今二つは、朝鮮半島を経由して大陸から伝わった仏教文化とが渾然一体となって現在の日本文化の基礎を創りあげたのではないかと考えられる。その際、おそらく、呂音階なる呂文化も仏教文化と一緒に大陸から伝わったと思われる。しかし、どうしたことかその音階は日本人の趣好になじまなかったのかいっしょに姿を消し、律音階から発展した陽旋法や陰旋法で日本民謡が形づくられている。そのことは先述したとおり兼好法師の『徒然草』が、そのことを立証している。

この日本民謡の基本をなす律音階が、今なお、はるか南の八重山や奄美の民謡の中に数多く遺っていることは黒潮が南から運んできた文化だと裏づける証ではないかと思う。しかし、沖繩本島や宮古にその音階の民謡の少ないのは一体、どうしたことか誰しも疑問を持つが、よく考えてみると、太古は同一の音楽文化圏であったに違いないが、それがその後の歴史的異変(島津沖繩侵攻)によって、人心は乱れ、人々は「ファ、シ」の音階を含有旋法の音楽に心の安らぎを求めたのかも知れない。それが、現在の沖繩の独自の民謡を創りあげたのである。しかし、その中で、八重山や奄美は沖繩本島より遠く離れていたせいも、直接その影響が少なく、律音階の民謡が数多く遺っている。

しかもその中で、躍動する軽快な波乗りのリズムは海に生きる人々の共通な喜びを表現するリズムで如何に、その音階を異にしても海洋を生活の場として生きる人々の共通な文化といえることができる。その最も代表的な例といえ九州天草の「ハイヤ節」や、徳島の「阿波踊り」、それに、奄美の六調や沖繩本島の「カチャーシ」、それに八重山の「六調節」等が挙げられる。しかも、これ等はいずれも乱舞形の「ハイヤ形」の踊りとして、それぞれ地方の人々の喜びを表現する踊りとして暮しの中に息づいている。

三、音階から見た崎山ユンタ、崎山節の旋律の分析

八重山の多彩な民謡の旋法を分類して見る

と、律旋法(レミソド) (呂旋法) (ドレミソラ)、それに加えて琉球旋法(ドシソファミン)

の三つの旋法から概ね成り立っている。崎山ユンタや崎山節等の場合は、「ドレファミン

シ」の六音から構成され、東洋音階の五音構成の原理の型を破り、むしろ、西洋音階の七音構成の考え方に類似した感もしいでもない

シキ 抜キ
シキ 抜キ
シキ 抜キ

P.95 終

首里王府はその財政の建て直しのため、両先島（宮古、八重山）に過酷な人頭税を課したと言う。宮古、八重山の民百姓はその重税に喘ぎながら三〇〇年近くも塗炭の苦しみが続き、人々は軽うじて生きておつたと伝えられている。

聞くところによると、首里王府は財政の窮状を打解するため、八重山開拓の名のもとに西表島や裏石垣等の広大な土地に新しい村を創設するため、各離島からの寄せ人を容赦なく募り、新村創建を断行した。その無慈悲な強制措置はかえって、さまざまな悲しみを生み、その哀れな心境が謡として今に歌い継がれている。

「崎山ユンタ」を初め、「つんだら節」「久場山くいつ」等の民謡がその類である。

喜舎場永珣著『八重山民謡誌』によれば寛永九年（一六三二年尚豊王時代）に琉球在藩奉行が八重山に設置され、なお、寛永十四年（一六三七年）には人頭税制度とそれをより拡大し、遂行するための村ばぎ等の強行措置が断行される等、当時の八重山の農民にとっては、実に無慈悲な措置と言わざるを得ない。

なお、寛永十八年（一六四一年尚賢王時代）には琉球在藩奉行監視の目的で大和在藩奉行が設けられる等、当時の八重山の社会では二つの行政管理下の中で民百姓は生きていかねばならない最悪な事態に陥り、彼等は生きた心地はしなかつたであらう。

そのような厳しい社会環境の中で、弱い民百姓は自分の余りにもみじめさを憂い、その心境を動物に風刺し当時の権力者に抵抗した民謡等を今に残している。

二 村ばぎ強制措置は悲劇を生む

王府の八重山開拓の名のもと村ばぎ行政措置は、確かに建前論としては結構かも知れないが、生末を裂くような村ばぎ行政は余りにも民百姓の人権を無視した無謀な措置であった。しかも、有病地帯（マラリア風土病）への強制移住とあつては何時の時代であつても決して許される行為ではない。これ等の行為は当時の階級制度の厳しさを物語る一つの証拠とも言えよう。

当時の八重山の農民社会では、厳しい環境の中にあつても彼等は何とか生き抜く事を考え、互いに心の絆（きずな）を深め、団結を図つた。そこで編み出されたのが、いわゆる結（ユイ）による共同体組織であつた。しかも、彼等はその中で、日頃のうら憤のはげ口を「結い歌」（ユンタ、ジラバ）に求め、精一杯、我を忘れ謡つていたのかも知れない。結い作業は彼等にとつては心の安らぎを与える場であると同時にまた結束を図る場でもあつた。そのため、彼等は結いを通し心の傷を癒しながら何とか生きることができたのであろう。この手段は当時の農民の唯一の生きる哲学であつたのかも知れない。

各離島からの寄せ人達は深い傷痕を背負いながら、風土病と闘い、新村創建に傾注したと言う。その強制移住にまつわる悲哀の謡として「つんだら節」「久場山くいつ」、それに「崎山ユンタ」等が挙げられる。

「つんだら節」「久場山くいつ」は裏石垣の野底村創建の際、黒島からの強制移住にまつわる許婚の間を引き裂かれた哀れな心境を謡つた民謡で、今、なお語り継がれている。また、「崎山ユンタ」は波照間島からの寄せ人として崎山村創建にきたある老婆の哀れな心境を謡つた歌で、その後、役人は老婆の余りの哀れさに同情し、後に、生り島、波照間島へ帰えしたと言う。この「崎山ユンタ」は、後に、崎山と人那国寛照氏に採りあげら

も、また、納得できない。ただ崎山ユンタについては、終止の旋律を「シレド」で終わりをまとめたところ等は、琉球旋法的な感もするが、琉球旋法にもあまり見当たらない。「レ」「フ」の音を用いられているので、厳密に琉球旋法と断定しかねるところがある。しいて言えば、旋律の流れから見た場合、呂旋法と琉球旋法を混ぜ合わせた一種独特な音階としか今のところ言いようがない。

なお、崎山節の終止の音を見ると、また、面白いことが発見される。極く普通の曲の終止は、概ね「主音」で終わるのが曲の自然の流れであるが、崎山節の場合には、不完全な「ソの音」で終止している。これ等は、当時の世相が、農民にとっては、如何に敵しく、みじめで哀れな時代であったかを曲の上から伺うことができる。

以上、二題の民謡の旋律から、当時の世相に対する彼等の不満、うっ憤が自然の裡に曲の中にも爆發し、心の不安が音の不安定な「ソの音」として表現されたのだろうと考えられる。崎山ユンタや崎山節の曲全体から醸し出される感じは、人間の心の哀れさがにじみ出て、聞く人の心を強く魅きつけるものがあるのはそのためである。

四、まとめ

八重山における人頭税の中で過してきた農民の悲哀の歌として、崎山ユンタと崎山節を採りあげてみた。その外にも黒島から野底村創建のための村ばぎの際の農民の悲しみを謡った民謡「ちんだら節」の中にも、また、同じ心境を伺うことができる。

おそらく、当時の農民たちは村ばぎ等の悲劇の中で、役人の横暴を恨み、時の行政の無慈悲さを呪い、弱者の

心境を「ファ、シ」の哀れな音に求めながら、自らの心を癒していたにちがいない。

もともと、「ファ、シ」の哀調を帯びた音は、東洋音階の立場から言えば、魔の音として東洋の民謡の音階として、あまり用いられていないと言う。しかし、沖縄の民謡の中には、ふんだんに使われているのは、大変珍しい。むしろ沖縄民謡の基調をなしていると言っても言い過ぎではないと思う。若し、この二つの音の持つ意義が人間の心の哀れさの極限を表現する音とするならば、その歴史的背景があるからであろう。今後の沖縄の民俗学の研究の上からも最も興味深い問題である。

人頭税はさまざまな悲哀を生む

一、はじめに

謡(うた)は、その時代の世相を克明に反映するとよく言われる。そのことは、八重山の民謡の発生から開花までの過程を見て窺うことができる。

歴史をひもとくまでもなく、その昔、この平和な島、八重山にも時代の波がおしよせ、島を大きく変えさせたものがある。即ち、慶長十四年(一六〇九年尚寧王時代)に琉球国は薩摩軍の侵略に遭い、それ以後と言うものは首里王府は薩摩の搾取に苦しめられ、財政は極度に逼迫し、そのしわよせが大きく住民に負いかぶされた。

そのため、人々は生きる希望さえも失い毎日が貧困と不安、それに、焦燥の明け暮れで世相は荒廃し、日々苦悩の中に過していったと伝えられている。